わたしの聖ジハード戦

女性が働くということ

連221載

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

流行の顛末

流行は作られるという。わかっていても気になるのが流行、特に女性にとってファッションは、程度の差はあれ、その動向を意識せずにはいられない。

バブルの時代、肩パットなるものが流行った。ジャケットの両肩に大きなパットを入れてこんもりした形を作ると、全体に逆三角形のスタイルになり、下半身がほっそり見え、小顔効果が期待できる。それにワンレングスの黒髪を合わせれば、立派なバブル期の最先端スタイルになる。ワンレングスとは、前髪を含めたすべての髪の長さを均一にしたヘアスタイル。

私の友人も、前髪を伸ばすのに苦労しつつ、長い時間をかけてあこがれのワンレングスに仕立てていたものだ。

ところが、時代が変わると、肩パットもワンレングスも途端に古くさく、時代錯誤に映る。つまり「流行おくれ」となり、場合によっては笑いの対象となる。

ブーツもしかり。長くロングブーツが流行のトップであったが、いつのまにかその座をショートブーツに譲って久しい。今やロングブーツを見ると、野暮ったさしか感じられない。

いったい、どういうことだろうかと思う。かっこよくおしゃれであるということは、永遠ではなく、期間限定ということか。流行におくれてはならないと気張っても、流行は目まぐるしく変化し、留まることがない。

流行は一国の運命をも左右する。17世紀のハプスブルク家のマリアナ王妃。その肖像画を見ると、ひとめでハプスブルク家の血を受け継いでいるのがわかる。ハプスブルク家は、血縁結婚を繰り返しているために、皆、色白で長い顔にしゃくれた顎。その特徴は後年のマリーアントワネットにも受け継がれている。

マリアナ王妃の髪型はリボンや羽を飾り付けた兜の様。スカートは大きく横へと広がっている。スカートの形を整えるために、クジラの骨や鉄で作った腰枠を装着し、それゆえスカート特有のドレープやふわふわ感が失われている。この頃すでにこのような四角張ったスカートは他国ではみられず、もっぱらスペイン宮廷でのみ愛用されていた。世界が大きく動くなか、旧態依然とした髪型や衣装を身にまとい続けるスペイン女性たちは他の国の人々の嘲笑の対象であったのだ。すでに、ここにハプスブルク家凋落の予感が漂っている。

一方で、流行は繰り返されるという。

2020年秋には、葛飾柴又の寅さんが映画で着ていたような、長めでチェック柄のジャケットが流行った。若い女性がオーバーサイズで着るとかっこもつくが、私などが手に取ると、どうしても寅さんにしか見えない。流行は人を選ぶのだろうか。

ところで、流行というとき、それはファッションに限らない。2020年からずっと今にいたるまで、世界の人々を悩ましている新型コロナウイルスの蔓延も、流行と呼ぶ。

ファッションでいう流行には、その後ろに仕掛け人が存在することが珍しくない。新型コロナウイルスは仕掛け人がいないぶん、傍若無人にふるまい、人間を翻弄する。しかし、どんな流行も終わりがあるからこその流行である。いつの日か、過去の話となる日が必ずやってくる。その日を信じてひたすら祈り続ける、今できることはそれだけだ。

イラスト・伊藤香澄